オブジェクション１６４

光と影 編

本編は、次の１１項目からなる。（文中敬称略）
文中の会話文にはフィクションが含まれる。
以下の【 】は、新聞記事・週刊誌記事等の引用・要約を示す。

① ホルムズ海峡波高し
② 日韓のつっぱり合い
③ 戦没者遺骨探しの旅
④ 日本の防衛費・８年連続の増額
⑤ 求人広告・掲載料ぼったくり
⑥ かんぽ職員のノルマ地獄
⑦ リクナビの内定辞退率を参考にする採用企業
⑧ 青葉真司・京都アニメ第１スタジオ炎上させた男
⑨ 立花孝志・うさんくさい男
⑩ 小泉進次郎・具体策はあるかと聞かれて黙る男
⑪ 山本太郎・みごとな街頭演説をする男

岡森 利幸

① ホルムズ海峡波高し

【毎日新聞朝刊 2018/5/10 一面
米がイランとの核合意から離脱した。イランに対し制裁を再発動する。トランプ氏は弾道ミサイル開発などの規制が核合意に含まれていないことに、強い懸念を表明した。】
【毎日新聞朝刊 2018/5/14 国際
サウジ、タンカー２隻が「破壊活動」の攻撃を受け、損害を受けたと発表した。】
【毎日新聞朝刊 2019/3/31 社会
トランプ氏、イランのロウハニ大統領を名指しし「二度と米国を脅すな。さもなくば歴史上類を見ないような重大な結果を招く」と警告したことがある。ツイッターで「もしイランが戦いたいのなら、イランは正式に終わることになる。二度と米国を脅迫するな」と投稿した。】
【毎日新聞朝刊 2019/6/15 一面、クローズアップ

ホルムズ海峡でのタンカー攻撃、米国は、攻撃後にイランの革命防衛隊が不発の機雷（リムペット・マイン、磁石などで船体に吸着させる爆弾）を船体から回収していたと断定している。船員「飛来物を見た」】

【毎日新聞夕刊 2019/6/21 一面
イランが米の無人機を撃墜した。】

【毎日新聞夕刊 2019/6/21 総合
イエメン、親イラン武装組織「フーシ派」がサウジの空港を無人機で攻撃か。】

【毎日新聞夕刊 2019/7/2 総合
イラン濃縮ウランの貯蔵量上限を超えたことに、トランプ氏「火遊びしている」
ポンペオ国務長官「世界最大のテロ支援国家が核開発を利用し、国際社会をゆすろうとしている」】

【毎日新聞夕刊 2019/7/11 総合
イランがホルムズ海峡付近で英タンカーを拿捕未遂。英の護衛艦が警告し、中止。】

【毎日新聞夕刊 2019/7/19 総合
ホルムズ海峡で、米が米軍の強襲揚陸艦「ボクサー」に近づいた（１０００ヤード以内）イランの無人機を破壊したと発表。】

【毎日新聞夕刊 2019/7/20 一面
イランの革命防衛隊が、ホルムズ海峡で英タンカーを拿捕した。輸送阻止（イランタンカーがジブラルタル海峡で拿捕された）の報復か。】

【毎日新聞朝刊 2019/9/10 国際
ジブラルタル海峡で7月にイギリスによって拿捕され、イギリスが制裁対象国（シリアなど）に向かわないとの確約をイラン政府から得たとして開放していたタンカーが、シリア沖に停泊していた。】

【毎日新聞朝刊 2019/9/16 総合
９月１５日の攻撃で、サウジ石油生産が半減した。フーシが「無人機１０機で大規模な作戦を実施した」と犯行声明を出した。】

【毎日新聞朝刊 2019/9/18 総合
サウジ石油施設攻撃。攻撃がイラン国内の基地から発射されたミサイルなどによって行われた可能性が極めて高いことが判明した渡米ＣＮＮが報じた。イラン・イラク国境近くにあるイラン基地から発射され、イラクとクウェートの上空を飛行し、標的になったサウジ東部アブカイフなどの石油施設を爆撃した。】

【毎日新聞夕刊 2019/9/21 総合
サウジに米軍を増派する。ただし、トランプ大統領はイランへの対応について軍事的な報復措置に慎重な姿

勢を示した。クライス油田とアブカイフ（石油プラントがある）への攻撃で同国の日量生産能力の半分の生産が停止したと発表。】

【毎日新聞朝刊 2019/9/22 総合

サウジ石油施設攻撃でサウジ国防省は「無人機１８機、巡航ミサイル７発だった」と公表。（イラン側が）サウジの原油生産に打撃を与えることでイラン産原油の禁輸措置の解除を促す思惑があったと指摘される。】

【毎日新聞朝刊 2019/9/26 総合

イランのロウハニ大統領が国連総会の一般討論演説で「制裁で屈服させようとする敵とは絶対に交渉しない」米国が先に対イラン制裁を解除することが交渉に応じる条件だとの立場を改めて示した。制裁解除を条件に、米国が離脱したイラン核合意の「小さな変更や追加・修正」に応じる考えを記者団に語った。】

【毎日新聞朝刊 2019/10/6 国際

米マイクロソフト社は、イラン政府が関わる集団「フォスフォラス」が米大統領選関係者に大規模なサイバー攻撃を行なったことを発表した。】

イランと欧米主要国との関係が相当に悪化している。欧米側が制裁で圧力をかけるのに対し、イランは挑発的に軍事行動を起こし始めた。去年（２０１８年）５月に、トランプ米大統領がイラン核合意から離脱し、制裁を再発動することを決めてからことだ。イランは、石油の輸出などが制限され、国内の経済が厳しい状態になり、打開するために攻撃的になっている。

今年になって、イランの攻勢がエスカレートしているようにみえる。特に、９月１４日のサウジ石油生産への攻撃は、すさまじかった。石油生産の半分が止まるぐらいだから、甚大な被害だ。復旧に３週間かかった。サウジアラビア政府が報復攻撃しないのが不思議なぐらいだ。

厳しい制裁に対するイラン側の反抗の表れであり、「窮鼠（きゅうそ）、ネコを噛む」的な行為であったかもしれない。

トランプ米大統領がイラン核合意から離脱したのがきっかけであり、国際的に問題だった。ミサイル開発が気になるなら、核合意とは別に、交渉を進めるべきものだ。離脱したことで、イランに核開発を再開する口実を与えたことになったし、制裁強化によって石油供給の問題が世界に影響を与えている。そして、イラン革命防衛軍の軍事行動を活発化させた。「おれたち

に敵対するなら、ホルムズ海峡を封鎖してやる！　おれたちのホルムズ海峡だ！」という脅しの姿勢を見せている。タンカーを攻撃したのも、その一環だろう。6月のタンカー攻撃には、リムペット・マインを使った可能性が高い。一種の時限爆弾だ。彼らはゴムボートなどに乗って近づき、港に停泊中のタンカーの船腹に、闇に乗じて貼り付けたもの、と私は理解している。そして、タンカーがホルムズ海峡を通過するときに爆発させる仕掛けだ。日本のタンカー一隻も攻撃を受けた。

　そして、9月のサウジアラビアの石油施設への攻撃は戦術的にみごとなものだった。巡航ミサイルや無人機を使って遠距離の目標に命中させている。それらは迎撃されなかった。ミサイル防衛のレーダー網をかいくぐったことがすごい。イランのミサイル開発の成果だろう。トランプ氏が「ミサイル開発をやめろ！」と圧力をかけても、もう遅いようだ。

② 日韓のつっぱり合い

【毎日新聞朝刊 2019/5/2 総合
韓国で、元徴用工側が日本企業の資産売却を申請した。】

【毎日新聞朝刊 2019/5/10 国際
韓国で、元慰安婦訴訟の審理開始が可能になる。朴槿恵政権時に日韓合意で設立された元慰安婦のための「和解・癒し財団」の解散を決定している。】

【毎日新聞朝刊 2019/7/3 経済
日本の輸出規制強化で、韓国の半導体は3カ月が限度と朝鮮日報が報道。】

【毎日新聞朝刊 2019/7/15 風知草
韓国にＮＯという意味。関係者の誰もが政府間合意を守らぬ韓国への不満を語った。】

【毎日新聞朝刊 2019/8/2 一面
ホワイト国から韓国を除外へ、今日閣議決定、米の仲介に応じず、輸出規制で日韓泥沼化。】

【毎日新聞朝刊 2019/8/2 社会
日韓交流、中止相次ぐ。韓国で日本製品の不買運動が始まった。】

【毎日新聞朝刊 2019/8/8 国際
ソウル中心部の「ＮＯ ＪＡＰＡＮ」旗を撤去へ。不買運動に批判の表れ。】

【毎日新聞夕刊 2019/8/13 国際】
韓国が輸出優遇で日本を除外した。（あからさまな）

対抗措置。】

【毎日新聞朝刊 2019/8/23 一面、クローズアップ、社会
韓国が軍事情報協定を破棄、日本の輸出規制に対抗。
韓国は世論を配慮し、自尊心を守る。】

【毎日新聞朝刊 2019/8/25 総合
日韓の情報共有の遅れがリスクになる。日本政府関係者「破棄されてしまえば、二度と結ばないだろう」
陸自と韓国軍の交流中止。韓国世論に拒否反応がある。】

【毎日新聞朝刊 2019/8/29 総合・社会
韓国・ソウルで韓国人に髪をつかまれた女性に筋違い批判「韓国へ行くのが悪い」】

【毎日新聞朝刊 2019/9/7 総合
ソウル・釜山市議会が日本２８４社を戦犯企業として不買条例案を可決した。】

【毎日新聞朝刊 2019/9/12 一面
韓国、日本をＷＴＯ提訴した。
輸出規制で対話欠き、主張が平行線になっている。】

【毎日新聞朝刊 2019/9/19 一面
訪日韓国人が、先月４８％減。】

文在寅（ムンジェイン）氏が大統領になると、慰安婦の問題が蒸し返された。やっと合意した救済方法がひっくり返され、「日本政府が謝罪していない」などとの理由で白紙に戻された。さらに徴用工問題が噴出してきた。日本にとって、そんな補償などは、日韓平和条約のとき多額の金を払って、韓国政府の責任でまとめて処理してくださいね、と言い渡していたはずで、合意済みのことだった。政府間の約束事だった。日本は、韓国政府に約束を破られたことになる。

しかし徴用工問題は、韓国世論を揺り動かし、反日の機運が大いに高まってしまった。これは文在寅大統領の目論見どおりのことかもしれない。韓国国民の被害者意識をさらに高め、心を一つにできるから、不満のはけ口になるというものだ。

この問題の根本は、そもそも、日本企業が彼らに賃金をまともに払わなかったことが原因だろう、終戦時のどさくさにまぎれて……。

日韓政府のトップは、互いに国粋主義的（自国愛が強い）であり、国民の手前、自国が譲歩することはできず、互いに妥協できないことのようだ。相手国が「嫌がらせ的」措置をとれば、負けじと、対抗措置をとる。対抗措置をとることが、解決への道を遠ざける結果となっている。これは、ほとんど意地のつっぱり

あいだから、おとなげない。こじれた関係になってしまっているのは、ざんねんなことだ。

しかし、韓国政府は、司法（韓国の最高裁判所）が判断したことだから、それに介入できないという立場をとっている。韓国の最高裁判所が、日韓合意をどう判断したかが問題になる。結局、個人の請求権は残っていると判断したから、日韓合意を重視しなかった、つまり軽視したことになる。

それでは、日本側としては、納得いかないだろう。最高裁判所のそんな判断が出てしまったのは、韓国内の法的な整備ができていなかったことになる。そんな「密約」的なことは法整備できなかったのかもしれない。

日本の２８４社が戦犯企業と名指しされるとは、異常だ。１０００年たっても、その汚名は消えないかもしれない。何度でも蒸し返される……辟易してしまう。韓国人と日本人は、姿かたちがこれだけ似ているのに、何ということだろうか、と私は嘆きたい。団体行動が好きなところも似ている。ときどき、いやな性格をみせることも似ている。

日本が７月に表明した輸出規制強化が、日本の思惑以上に、韓国の危機感を刺激した。韓国の人はメディアにあおられたかのように、それに激怒し、反日に動き出した。

日本人旅行者が嫌われ、ソウルで日本人女性が嫌がらせされる事件も起きている。「（日本女性が）韓国へ行くのが悪い」とは筋違い批判だと、毎日新聞は言っている。韓国ではヘイト行動が起きているようだ。韓国から日本への旅行する人もぴったり止まってしまった。

でも、ここへ来て両国に〈反目しあうのも、いいかげんにしたら？〉という声も出始めている。

③ 戦没者遺骨探しの旅

【毎日新聞朝刊 2010/10/8 国際
フィリピンでの日本兵遺骨に混入疑惑があり、厚労省が収集事業を調査する。住民「フィリピン人の骨を（日本の遺骨収集団に）売った」】
【毎日新聞朝刊 2014/7/14 広告・週刊ポスト
朝鮮は、遺骨１柱２９００万円を要求した。】
【毎日新聞朝刊 2015/10/15 オピニオン・記者の目
戦没者遺骨収集推進法案、早期成立は国の責務だ。】
【毎日新聞朝刊 2017/3/29 一面

フィリピンでの遺骨収集再開することを、日比両政府が合意した。ＤＮＡ鑑定など徹底する。

２００９年度には７７４０柱を収集、厚労相の分析によると、収集された遺骨の約半分は日本人のものでなかった。】

【毎日新聞夕刊 2019/6/12 憂楽帳

戦没者の遺骨収集で、「自衛隊を投入してはどうか」と提案する野村光次さん、体力と山野対応の装備があるだけに合理的という。】

【毎日新聞朝刊 2019/7/30 社会

シベリア抑留の複数の遺骨で「日本人以外」とＤＮＡ鑑定で専門家が指摘していた。】

【毎日新聞朝刊 2019/8/24 土記・青野由利

戦没者遺骨、どう返す】

【毎日新聞朝刊 2019/9/19 社会

ロシア９カ所からの遺骨６００人分取り違え、厚労省が公表しなかった。

１９９９～２０１４年に約６５０人分を収容した。残りの５０人分は鑑定できないものなどだった。】

【毎日新聞朝刊 2019/9/20 総合・社会

厚労省は、シベリア抑留者の遺骨を外国人のもとと取り違えて持ち帰っていた問題で、ロシア国内の９埋葬地の約５９７人分の遺骨が日本人のものではない可能性があるとの調査結果を公表した。】

【毎日新聞朝刊 2019/9/23 総合

遺骨ずさん調査に怒り、元シベリア抑留者「慰霊の意味ない」

厚労省の、事なかれ主義の組織体質が露呈した。】

【毎日新聞朝刊 2019/10/5 土記・青野由利

遺骨鑑定の本気度が問われる。鑑定技術は進歩しているが、大学の研究者がボランティアでできることではない。厚労省は本気度を示してほしい。】

前掲の古い記事で示したように、遺骨のとり違いを約９年前にフィリピンでしでかしたが、今般またシベリアでもやっている。

戦没者遺骨収集は政府の責務だとしても、収集するのは現地の人の骨ばかりという実態がある。

今回ロシアから中止を申し渡されるまで、厚労省は遺骨収集の旗振りをやめなかった。それまでに何度も専門家の鑑定で「遺骨が日本人のものでない」と報告を受けていたのに、それを無視していた。約５９７人分の遺骨とは、大きすぎる数値だ。収容したのが６５０人分で、そのうち約５９７人分が取り違いと判明し、

残りの５０人分は鑑定できないものとは、ひどすぎる。ＤＮＡ鑑定しなければならないだろう。ＤＮＡ鑑定せずに、〈これは日本兵のものだろう〉などと推測で持ち帰るのは、とんでもないことだ。

日本人でない骨を持ち帰ってしまったとわかったら、すぐに返し、丁重に埋め戻さなければならない。現地の人々、特にその遺族に対し、最大限のお詫びをしなければならない。「墓をほじくり返してご先祖様の骨を日本に持って行った」わけであり、死者を冒涜（ぼうとく）したことになるから、謝ってすむ話でもない。国際問題に発展しうる。犯罪捜査の、冤罪にも匹敵する。

厚労省は返しもせず、先延ばししていた。厚労省は、そんな重大さにも気付かないボンクラな人たちの集まりということになるだろう。

「日本人のものでない」という鑑定結果が出ても、厚労省が握りつぶしている事実が複数ある。そして、多くは千鳥ヶ淵の集合墓地に埋めている。厚労省はその数を誇らしく掲げている。しかし、日本人のものでない数について掲げられなかったのは、隠蔽ということだろう。ばれなければいいという類（たぐい）だから、悪質だ。骨だけ集めればよく、鑑定などしたくなかったのだろう。

厚労省が推進している遺骨収集事業では、「どこの馬の骨でもかまわないから、収集しろ！　現地で掘り返して骨を拾ってこい！」という暗黙の指令を、この外郭団体などの実働部隊に出しているかのようだ。そして「１柱みつけたら、それなりの手当てを出そう」と、けしかけているのだ。現場では、ほとんど「宝探し」の状況であることが見て取れる。いくつかの疑問を列挙すると――

・埋葬された遺骨が残っているか

そもそも７０年以上たった遺骨が残っていることが、疑わしい。戦病死した日本兵の墓になんて、まともな墓標は立てられないだろう。木製の墓標では、数年も持たない。遺骨とともに墓標も、多くは分解して土となってしまっているだろう。骨片が出てきたとしても、そんな状態では判定が難しい。家畜や野獣の骨などが混じっているかもくれない。動物の骨と人の骨ぐらいは区別が付くかもしれないが……、

・調査する場所（掘り起こす墓）が正しいか

ロシアの行政機関に公式記録が残っているのだろうか。機密的な文書扱いだろうから、日本の調査団にやすやすと見せてくれるとは思えないのだが……。

「これは日本兵の遺骨だ」との現地の人の証言や記録

に頼るなら、あいまいさがあり、まず疑わしい。「協力金を出すから、教えてくれ」などと、そんな情報に報酬を与えるとなると、詐欺的な人物が近寄ってくるに決まっている。

シベリアは、独裁者スターリンが「自分の気に食わない人々」を大勢送り込んだところであり、彼らの遺体が日本兵のもとと同じ扱いで「身元不明者」として埋葬された可能性もあるだろう。あるいは、シベリアに住み着いた民間の日本人もいるだろう。骨をうずめる覚悟でやってきた彼らの骨をほじくり返していないだろうか。また、日本人のルーツを考えると、シベリアに日本人によく似た人がいるだろう。日本人のものらしい骨が日本兵のものとは限らない。

・掘り出した骨は誰のものか

氏名を特定するものがなくても、専門家が見れば、骨の一部を見ただけでも、かなりのことがわかるかも知れない。だろう。死亡推定年代、性別、死因、死亡年齢、民族的な差異などを見極めれば、日本兵を判別できることもあるだろうし、遺品として服の切れ端や、所持品もそばにあるかもしれないから、判別の参考になるだろう。状況が確かであり、決め手があるなら、持ち帰る意味はある。

しかし、結果的に決め手のないものばかりを持ち帰っている。鑑定できていない。現地での鑑定がろくにされていないことがうかがえるから、まともに鑑定できる専門家が現地に同行していたのだろうか、疑わしい。

原則的に、氏名を特定できた遺骨を持ち帰るべきだろう。遺骨を遺族の元に返すのが最終目的だろうに、そんな誰のものかわからない遺骨を持ち帰っても、しようもないことだ。一緒くたにして千鳥ヶ淵に収納するだけだろう。

戦没者遺骨収集事業は「探せば、見つかる」という望みを抱かせる。戦後７４年たつのに、厚労省はまだまだ続ける意欲にあふれている。戦没者遺骨収集推進法にのっとっているわけだし……。安倍政権の強い意向もある。戦没者の遺族の意向でもある。彼ら遺族会は、縮小してはいるものの、まだ与党に圧力を加えられる存在を保っている。

厚労省は、彼らに〈遺骨収集事業をやっているよ〉という姿勢を見せるのが大事であり、収集した人骨の内容はどうでもよいのだと考えているのだろう。予算を確保するために続けているという見方もできる。厚

労省は「金」だけ出して、成果の数字を掲げるだけの政府機関になっている。厚労省は「戦没者の遺骨を掘り出していますよ。予算も十分にとって、やっていますよ」という姿勢を見せているが、実態は「人々を雇っていますよ。（金がほしいだけの怪しげな人たちかもしれないけれど）彼らが現地で遺骨をせっせと掘り出していますよ。日本兵のものと見分が付かない骨も、可能性があるものなら、ちゃんと持ち帰って千鳥ヶ淵に埋めさせていますよ」という姿勢を見せている。ずさんなやり方なのだ。おそらく官僚たちは〈厚労省は骨を捜しに行く行政機関ではない〉と思っているのだろう。それなら防衛省がふさわしいのかもしれない。

遺骨探しのために「自衛隊を投入してはどうか」という案がある。しかし、隊員たちがシベリアやニューギニアの奥地へ探しに行ったら、その過酷さで戦意を喪失するだろう。

でも、いまさら、日本兵の遺骨らしいものを外国で掘り出してくること自体が遅すぎることだ。ＤＮＡ鑑定などの科学的技術が発達していない年代で行うべきだった。そうでしょう？　厚労省さん！

④ 日本の防衛費・８年連続の増額

【毎日新聞朝刊 2018/12/13 一面
Ｆ３５を１０５機購入する。うち４２機はＦ３５Ｂ。すでに購入を決めている４２機を合わせて計１４７機となる。】
【毎日新聞朝刊 2019/1/16 記者の目
空母構想がある。政府は専守防衛を軽視する。】
【毎日新聞朝刊 2019/8/22 一面
防衛費、概算要求は最大の５．３兆円。
Ｆ２後継機の予算を計上する、英国は次世代戦闘機「テンペスト」の開発を目指しており、日本政府は共同開発の可能性を探る。】
【毎日新聞朝刊 2019/8/31 総合
防衛費増大５．２兆円要求。空母化に３１億円。Ｆ３５Ｂを６機取得する費用（８４６億円）。】

安倍政権での防衛費の増大が目立つ。毎年のように、メディアがそれを報じているが、批判的論調が弱い。しかし、巨額な防衛費は国民にとって大きな負担だ。国民生活全般に財政悪化のしわ寄せを受けることになる。防衛費をそんなに増額してどうする？

防衛費は軍備にほかならない。日本が軍備を着々と増強している現状には、大きな疑問符が付く。これでは、近隣諸国から「日本はまた軍国主義国家への道を歩んでいる」と思われても仕方がない。海上自衛隊が旭日旗をふりかざしていることが、その象徴とされるだろう。（それは海軍旗と同じだから、韓国に対していやがらせになっている）

一連の増額には、もう歯止めがかかっていない。そもそも、増額分の「財源」がどこにあるのだろうか。社会保障の「財源」は消費税に求め、税率を１０％にアップしたわけだろうが、防衛費については、何を増税したのだろうか。

結局は、いわゆる借金で穴埋めしている。国債の発行でほとんど賄っている。防衛費の増額分は、国債に増額に直結するから、防衛費のふくらめば、国債がふくらむ。

日本は財政に問題があるというのに、アメリカから武器を爆買しているという批判も強い。最新ステルス戦闘機Ｆ３５を１４７機買うことを去年、決めている。陸上配備型ミサイル迎撃システムの「イージス・アショア」の２基も、そうとう高い買い物だ。日本が兵器を必要としているというより、アメリカ政府に買わされているという一面もある。批判が出たとしても、日米の約束事になっており、もうキャンセルはできそうもない。

日本が空母を持とうしていることが、軍備拡張の象徴のようなことだ。空母は専守防衛を逸脱する「攻撃兵器」と言わなければならない。「いずも」や、その姉妹艦である「かが」にＦ３５Ｂを搭載すれば、堂々たる空母になる。ちょっとした改造でそれが可能になるのだから、はじめから空母を想定して建造したのだろう。攻撃型ヘリコプターを運用するだけでも、かなりの「戦力」を発揮するものだけれど、Ｆ３５Ｂなら、攻撃能力が一段と増すことになる。ただし、マトの大きい空母は、相手国の対艦ミサイルや水中ミサイルに狙われたら、一発の命中で撃沈される恐れがある。

最新戦闘機というものは、訓練で墜落したりして損耗しやすいものだし、しばらくすると、旧式化してくる。特に電子部品はアップデートが必要だ。部分的な改造ですめば、それでもいいが、維持費は高い。短い年月で機種変更されるものを選定したら、こんなに無駄なことはない。近年ではＦ２戦闘機がそれに該当する。それを実戦配備したのは、つい最近のことであるはず（私の主観だが）なのに、防衛省はもう後継機を

考えている。兵器の類は、ぜいたくな「おもちゃ」なのだ。危険な「おもちゃ」でもある。

そもそも今の日本に最新鋭の強力な兵力が必要だろうか。この国の何を守ろうとするのか。

「国土を強靭化にする」は安倍首相の得意とするキャッチ・フレーズだが、国土といっしょに「兵力」も強靭化している現状がある。１９９０年代に米ソの冷戦が終わり、世界は平和・安定の時代に入っているというのに、安倍政権は、世界がまた次の戦争の時代に入り、日本が巻き込まれる危険があるとでも言うのだろうか。

領土意識がへんに強いところがある。たとえば、人も住んでないような離島などを、他国がほしけりゃ、くれてやればいい。竹島も尖閣諸島も……。それを命をかけて守る必要は、はっきり言って、ない。

⑤ 求人広告・掲載料ぼったくり

【毎日新聞朝刊 2018/6/12 総合・社会

求人広告サイトで、「無料期間が過ぎた」ことで高額請求されるケースが相次ぐ。零細事業者が標的になっている。契約後に送った規約などに「期限内に書面で解約しないと有料になる」と書いてある。思いがけず高額な掲載料を請求されたトラブルの相談を全国１５０以上の弁護士が受けている。中には民事裁判を受注している弁護士もいる。請求件数としては数百件に上るとみられる。トラブルとなったサイトは２０前後が確認されている。

実際に請求された金額を支払った事業者が取材に応じた。その事業者は「有料になるという説明はなかった」と憤る。今年3月、佐賀県内に数店舗展開する薬局の担当者に、求人広告の運営会社から「3週間無料のキャンペーンで登録しないか」と電話がかかってきた。それならばと、ファックスで送られてきた申込書や規約書に社名などを書き込み、送り返した。電話では「3週間無料の分だけ」と伝えていた。しかし4月末、約４５万円の請求書が届いた。慌てて細かい時が並ぶ「規約」に目を通すと、「3週間以内に書面による解約の申し入れ」をしないと有料契約に切り替わるという趣旨の一文があった。「規約の中身を見落としたのはこちらの落ち度。でも電話では自動更新の説明はまったくなかった」。このサイトを通じた応募はいまだに一件もない。薬剤師は田舎では集まりにくく、人材不足。弱みに付け込まれた】

【毎日新聞朝刊 2018/6/13 総合・社会
高額請求の求人広告サイトで、他の求人情報を無断掲載している疑いが強い。「掲載している求人数を多く見せかけるためではないか」と指摘する。】
【毎日新聞朝刊 2018/7/28 社会
詐欺的サイトの求人に記者が３０事業者分、応募してみた。情報が企業に届かず。サイトから「後日、広告企業様よりご連絡させて頂きます」というメールがきたが、それっきり。】

わかりやすく再現するように説明しよう。
――記事の中の、佐賀県内に数店舗を展開する薬局の担当者をＡさんとしよう。求人広告の掲載を勧誘する業者が、「無料ですよ、無料」としつこく言うものだから、Ａさんは強く断る理由もなく、ちょうど店では薬剤師が不足気味だった。「求人なら、公共的なところに申し込もう」と思っていた。そんな聞いたことのないようなサイトを見て、本当にウチに応募してくる人があるだろうかと疑ったが、あれば「みつけもの」だと思った。あてにならないようなサイトに金を払ってまで広告を出すつもりはなかった。無料期間だけ掲載することに同意した後、申し込みの書類をせかされるように作成し、ファックスで送った。
しばらくすると、４５万円もの高額請求された。
Ａさんはあわてて業者に連絡する。「何だ、この高額請求は？ 有料で広告掲載を頼んだ覚えはないぞ！」
「無料期間が過ぎて有料期間移行したから、有料期間分の料金請求です」との業者は説明する。
「私は無料期間だけの掲載のつもりだった」
「それならそうと、無料期間中に、掲載停止の意思表示をしてくださいよ。送った規約書に書いてあるでしょ。それを受け取っているでしょうね。重要書類だから書留で送りましたよ」
確かにそれは受け取っていた。
掲載を停止する書面での連絡がなかったから、掲載を継続する意志があるとし、その人材募集広告を継続して掲載したのだ、と業者は言い張る。
「広告の継続のために、当方では少なからぬ費用が発生しているのだから、掲載料を払ってもらわないと、われわれが困る。もし払わないとなれば、損害賠償請求しますよ！」
言い方が居丈高（いたけだか）になってきた。だんだん言葉が荒くなり、脅しにかかる。「請求書どおり払わなければ、当社の顧問弁護士に相談し、訴訟手続きに入らせても

らう。おたくの方も弁護士と相談するんですね。……弁護士がいない？　それは残念ですね」と哀れむ――

高額な料金を支払わせる鍵となるのが、小さい文字で書かれた「規約書」だ。しかも、それは、無料掲載を依頼すると、付録のような形で送られてくる書類だ。中には、約３週間の無料期間が経過する日の直前になって送られてきたりした例もあるという。

有料期間になる前に掲載を打ち切ればいいのだが、それが簡単ではないのだ。電話で停止を連絡ことではすまない。書式にのっとった、しかるべき書類でなければならない。それが業者に届かないと、有料期間に移行し、しばらくして高額な請求書を送りつけるしくみだ。業者側の言い分では、「無料期間がすぎると、有料期間になる」ということは共通認識となっており、同意事項なのだ。

最初の業者との電話のときにも、「無料期間がすぎると、有料期間になる」という説明はあるだろう。「ちなみに有料とは、いくらなのか？」と金額に関心を持つ向きもあると思う。業者に尋ねると、はぐらかされる――「それなら、有料期間に入る前に、書類を送りますから、その紙面で明示しますよ」などというのだろう。高額になることを知らせない。巧妙なのだ。

あなたにはそれが明示されなくても、掲載料ならば、だいたいの金額の見当は付く。ネット広告といっても、ブログに掲載したりＳＮＳでメッセージを書いたりするのと、似たようなものだから、そこそこの金額しかかからないだろうと思う。

無料期間内で打ち切られるつもりでいるから、多くの人が気楽にそれに応じるだろう。一般常識的に考えれば、有料で掲載するときには、それなりの料金が示されたうえで、業者に注文するかたちで依頼するものだろう。

しかし、この業者にそんな常識は通用しない。その期間を過ぎたとき、１０万円単位の金の請求書を送りつける。有料期間に入ったにしても、いくらなんではそれは不当な金額だろうと思う。あなたがいくら抗議しても、規約書をたてに、「それを読まなかったあなたが悪い！」的な言い分で、言い返す。支払いは前払い制で、まとまった金額になることが書かれているのだ。

サイト運営業者は規約書を送りつけるが、客側の

「合意した」と言う返事を待たずに、かってにサイト運営業者が客から有料掲載の注文をとりつけたとみなし、掲載を続行するのは、おかしい。業者に都合のよすぎる契約だ。業者が勝手にサービスを提供して客に料金を請求することだから、まともな商取引ではない。

広告の無料期間を過ぎるときに有料期間を移行することを、これらの広告サイト業者は客に確認していない。顧客が〈料金を支払うという確約〉を取っていない。客が黙っていることを「契約継続の意思あり」と決め付けているのだ。契約条件が同じであれば、その解釈ができるだろうけど、無料と有料では条件がまったく違う。業者としては金を支払ってもらう手前、一般には確認するところだろう。金を支払う意思を確認せず、自動的に移行してしまうのは、合意を旨とする商取引として おかしなことだ。合意に基づかない取引をしたら、とうぜん客が金を払ってくれないだろう。

しかし、支払わせる強力な手段があるのだ。裁判が、金を支払わせるための手段になっている。一方的とも言える請求に対して、広告主が拒否しようものなら、裁判に訴える。裁判所が、ぼったくり業者の後ろ盾になる。訴訟になることは、一般の人にとっては大きな負担だ。脅威だろう。たとえ、客の勝訴で、業者に支払う義務はないと判決されても、利益になることは何もない。裁判を遂行するのには、そうとうな労力と費用（弁護料など）がかかる。多くの人が、しぶしぶ業者の言い値どおりの料金を支払ったほうがましだと判断してしまうだろう。

裁判になれば、広告主がサイトの担当者に電話で「３週間のキャンペーン期間中だけの掲載をお願いしたと言った」と主張しても、言った言わないの議論であるから、認められないだろう。裁判官は、提出された規約書を読んで、客が自動移行のことを知っていたと解釈し、サイト側の勝訴とするかもしれない。

実際に裁判になっているケースもあり、その判決が気になるところだ。もしも業者勝訴の判例が出れば、裁判所がサイト運営者のぼったくりを公認することになる。被害者がますます増えることになる。

こんな詐欺的手口で高額掲載料を請求するサイトは２０前後あるという。つまり、ぼったくりサイトが全国的にはびこっているのだ。人手が足りず、求人を出したい零細企業を狙い撃ちして、電話をかけまくっているサイト運営側の営業マンたちの存在が浮かび上が

る。
　この手法は、求人広告だけではなく、他の情報の掲載にも応用が利きそうだ。法的に手を打たなければいけないだろう。無料期間から有料期間に移行するときは、ネット業者が広告依頼主の継続意思を改めて確認することを義務づけるか、または、無料期間から有料期間に自動的に移行する契約などは無効とすべきだろう。

⑥ かんぽ職員のノルマ地獄

【毎日新聞朝刊 2019/7/10 経済
かんぽ二重徴収２万２０００件、郵便局員に時代遅れのノルマ追及。新規契約の手当てが大きいため、局員たちは新規にしたがる。】
【毎日新聞朝刊 2019/7/23 総合
かんぽ不正被害拡大、過大ノルマ。日本郵政は１５年、営業を担当する郵便局員の基本給を１割削減し、代わりに手当てを手厚くする供与体系に変えた。４０代の郵便局員は「手取りが一〇数万円になり、無理に契約をとらないと生活できなくなった。現場に不正募集を強いているのも同然だ」と訴える。現場でのプレッシャーも強まった。前述の４０代局員は、「午後８時まで帰るな」といわれ、契約がとられなければ休日出勤を強いられた。成績不良者は研修を義務付けられ、数時間にわたって「給与泥棒」と叱責された。
東北地方の郵便局に勤務していた５０代の男性は年間２００万円の契約ノルマに「厳しすぎてやっていけない」と昨年退職した。目標未達者は朝礼で詰問されたという。】
【毎日新聞夕刊 2019/7/29 一面
かんぽ契約書類偽造違反３件の事例、昨年度。過大なノルマを達成するため、不正に手を染めたという。】
【毎日新聞朝刊 2019/8/1 一面、クローズアップ
かんぽ契約約３０００万件を調査へ、不正販売謝罪。日本郵便局員に課せられるノルマ見直し。かんぽ不正１８万件。】
【毎日新聞朝刊 2019/8/14 社会
日本郵便、物販ノルマを廃止する。郵便局員が目標達成のため、自腹で物品事業の商品を購入する事例があったことも背景にある。】
【毎日新聞朝刊 2019/9/14 一面、総合
ゆうちょ銀、投信で不適切。７０歳以上に理解したか

の確認をせず販売していた。投信は購入者にとって元本割れのリスクがあるが、販売する金融機関は比較的高い手数料が稼げる。】

【毎日新聞朝刊 2019/9/21 経済

かんぽ調査が「不誠実」。契約内容を提示しない。契約者の意向を聞くだけ簡素な内容で返信を要求。】

【毎日新聞朝刊 2019/9/26 一面、クローズアップ

ＮＨＫ経営委員会が、ＮＨＫ報道番組［クローズアップ現代＋］を異例の「注意」をした。

『郵便局が保険を押し売り！？郵便局員たちの告白』の放送内容が、「犯罪的な営業を組織ぐるみでやっている印象を与える」ことで、郵政側が経営委員会に〈高圧的に〉抗議していた。】

ノルマが厳しいと、まじめで勤勉な郵便局員といえども、不正に走る。職場が『ブラック』になる。これは民営化による弊害かもしれない。

ノルマに追い立てられる職員たちはこう思い始める、「これは顧客にとって少し不利益になることだけれど、このくらいはいいだろう、他の同僚もやっていることだし……」

職員にノルマを押し付けたのは、かんぽの組織内で決めたことであり、ノルマの達成を管理するのは上長たち、つまり管理者たちだ。不正を実行したのは職員かもしれないけれど、それを指導したのは管理者たちだ。

「目標未達者は朝礼で詰問された」という職員の証言もあり、目標達成を厳しく管理していた様子がうかがえる。結局、組織的に不正をしていたことになるだろう。職員たちが不正行為をしたとしも、それで業務成績の数値が上向くことになるから、管理者たちは見てみないふりをしていたともいえる。何年も前から行われていたわけであり、管理者たちが〈それに気付かなかった〉とは言い訳になるだろう。つまり、組織ぐるみの不正ということになる。

ノルマが職員の尻を叩くムチになっている。手当ては、目の前に好物の餌をぶら下げるようなことだ。怠慢な人に対しては、それなりに効果がある方法だが、まじめな人には、かなりのプレッシャーになる。

かんぽ契約の成績は、郵便局の地域によって差があるだろう。職員の能力に関係なく、数値だけで手当てが増減し、給料に大きな差が付くとしたら、かなり不公平なことになる。

手当てが職員の意欲を高めるとしても、〈手当てな

しでは暮らしてゆけない〉という声が出るほど追い詰めるのは、酷なことだ。つまり労働環境が悪すぎる。記者の取材で、〈耐えられずに辞めた〉という声も上がっている。

しかし、そんな悲鳴のような声が経営幹部に届かないのは、おかしい。幹部たちは業績を上げることだけしか考えていない。成果主義に走っている。それに対抗するには、労働組合が弱すぎる、機能していない、と私は推測する。郵便局は大きな組織だけれど、まとも労働組合が結成されていないことになる。私にはその実態がよく分からないけれど。

ＮＨＫテレビ報道番組「クローズアップ現代＋」が『郵便局が保険を押し売り！？郵便局員たちの告白』と題して、この問題を掘り下げたのに対し、郵政幹部がその放送内容にクレームをつけ、「ガバナンスがまったく利いていない」とＮＨＫ経営委員会にかみついたことが明らかになった。幹部の一人は、その件でＮＨＫの記者に取材されたことも気に入らなかった。記者をヤクザ呼ばわりした。〈痛いところを探られた〉ようだ。

経営委員会が番組内容に干渉することは放送法で禁じられていることなのに、それを受けて、事なかれ主義的な経営委員会がＮＨＫ会長に「注意する」に至ったことも興味深い。郵政側にそんな高圧的な幹部がいるから、職員たちを不正に走らせたことになる。

⑦ リクナビの内定辞退率を参考にする採用企業

【毎日新聞朝刊 2019/8/10 経済
就職情報サイト「リクナビ」が就職活動の内定辞退予測データを企業に販売し、多くの学生が気付かないまま採用活動に使われていた。】
【毎日新聞朝刊 2019/8/14 社会
リクナビ内定辞退率データを、トヨタ、ホンダ、大和総研ホールディングスが購入していた。トヨタ「辞退者を減らすことが目的だった」と説明。】
【毎日新聞朝刊 2019/8/16 社会
リクナビ内定辞退率購入、りそな、アフラック、ＮＴＴコムウェア、ＮＴＴファシリティーズも】
【毎日新聞朝刊 2019/8/27 一面、社会
個人情報保護委がリクナビに是正勧告する。就職活動中の学生の「内定辞退率」を本人に無断販売していた。】
【毎日新聞朝刊 2019/9/7 クローズアップ

リクナビを行政指導。学生を配慮した異例の公表。】
【毎日新聞夕刊 2019/9/17 憂楽帳
最近、就職活動中の大学生の間で「大手病」がはやっているそうだ。各業界の大手企業にこだわりすぎて、就活に失敗して就職浪人したり、精神的に不安定になってしまう現象だ。就活サイトでは業界ごとの人気ランキングが掲載されている。
明治大４年の女子学生は複数の内定を得たが、中堅のメーカーに決めた。】
【毎日新聞夕刊 2019/10/1 学生
就活最前線、事情アンケートによると、囲い込み、オワハラも経験、内々定（早くから内定を約束する）もあった。】

就活中の学生の多くが、就職情報サイト「リクナビ」を利用するという。引く手あまたの新卒といえども、就活は神経をすり減らすものだ。大手企業に内定をもらえないで、悩むことも多いらしい。
内定辞退予測データが個人情報かどうかについて、頭をかしげるところがあるのだが、企業が個々の学生の採用を決める判断規準にそれを用いていると聞いて、納得する。

企業の採用担当者は、学生の履歴書や成績証明書などとともに、内定辞退予測データをにらんで、「こいつは内定辞退率が高いな、うちが内定を決めても辞退される確率が高いから、やめておこう」と『不採用者のトレー』にその書類一式を入れることになる。つまり、その学生についての内定辞退率データを内定の判断材料にしている。
採用する企業としては、募集する人員を確保したいが、辞退の数が多いと確保できなくなるし、多めに内定を決めると人員過剰になってしまうから、内定辞退について正確を期したいわけだ。就活中の学生の内定辞退予測データを買いたくなるのは無理はない。辞退の数が多くて、再度募集するのでは、いい学生は集まらないらしい。
内定辞退予測データは、ＡＩ（人工知能）が、各学生が「リクナビ」サイトをアクセスした内容・回数などの情報を密かに集めて、はじき出した数値とのことだ。かなり正確な数値が出るものらしい。採用する企業の、それに対する信頼が厚そうだ。企業にとって有用なツールかもしれない。
昨今の就活では、平均的に複数の内定をもらう。そのうちの一つを選ぶことになるから、就職・氷河期と

いわれたような年代の人にとってはうらやましい限りだろう。

学生の方は、たとえ内定を受けたら辞退しようと考えていたとしても、その企業から内定がもらえないのでは、「なぜだ？」と不可解な思いをすることだろう。気分が悪い。内定辞退予測データは確率的な数字だから、〈内定を受けたら、喜んで入社したい〉という学生を「辞退率が高い」と予測してしまう場合もあるだろう。それで採用されなかった学生の立場からすれば、やりきれない。そんなデータを企業に売ってほしくない。採用を検討しようとする企業側にはぜったいに知らせてほしくない。

この数値は密かに集めた情報から算出したものだから、「個人情報」に属するというわけだろう。

⑧ 青葉真司・京都アニメ第1スタジオ炎上させた男

【毎日新聞夕刊 2019/7/20 一面

９月１８日の京都アニメ放火で、火災は発生から約２０時間後の１９日午前６時２０分頃鎮火した。放火した男が「小説を盗んだから火を付けた」】

【毎日新聞朝刊 2019/7/20 社会

京都アニメ放火の青葉真司容疑者が隣人とトラブル。昨年８月と今年３月に「部屋から騒音が聞こえる」との通報で警察官が出動した。

今年７月１４日には別の部屋の騒音を隣室からと勘違いした青葉容疑者が隣室の壁をたたいたから、隣室の男性がインターホーンを鳴らし、「騒音はうちじゃない」と伝えると、「黙れ、殺すぞ。こっちも余裕ねえんだ」と繰り返し、胸倉をつかまれ髪の毛を引っ張られたという。男性は「本当に殺されかねないと恐怖を感じた」と話した。

屋上ドアの前で１９人が死亡した件について、京都アニメの八田英明社長「屋上に通じる扉には手で回す簡単な鍵が二つあった。消防の到着時は開いていたが、誰も外に出ていなかった」】

【毎日新聞朝刊 2019/7/21 社会

京都アニメ放火の容疑者は、茨城の集合住宅でも住民トラブルか。騒音で何度も苦情が寄せられた。音楽を大音響で流したり、壁をたたいたりし、深夜に目覚まし時計を鳴らし続けたという。壁や窓はハンマーのようなもので壊された跡があった。】

【毎日新聞朝刊 2019/7/23 社会

青葉容疑者は襲撃前、大型ハンマーや包丁６本など

多数の凶器を準備していた。事件直前ガソリンとライターを選んで襲撃したとみられる。事件直後「おれの小説、パクリやがって」と叫んでいた。
中学卒業アルバムの集合写真に姿はなく、不登校がちだったとの証言がある。】
【毎日新聞朝刊 2019/7/24 社会
京都アニメ放火、昨年ＨＰに殺害予告・脅迫が２００回あり、特定の同社社員を名指ししていた。書き込みは発信者の特定を困難にする匿名化ソフト（Ｔｏｒ）が使われていた。】
【毎日新聞朝刊 2019/7/25 社会
京アニ放火殺人、昨年９～１１月に殺害予告や社に対する脅迫が相次いだ。このため同社は催涙スプレーとさすまたを各施設に準備、第１スタジオに４台の防犯カメラを設置して警戒していた。】
【毎日新聞朝刊 2019/7/31 社会
京アニ放火の青葉容疑者と同姓同名者が京アニ小説に応募か。府警は２６日、青葉容疑者の自宅アパートの捜索で原稿用紙を押収した。応募内容や時期や回数も明らかにしていない。】
【週刊文春 2019 年８月１日号 京アニ放火犯を変えた父の自殺と母の勘当
父は再婚で、母との間に３人の子をもうけた。青葉真司は１９７８年５月に次男で生まれた。貧しい生活をしていた。
小学低学年のときの友人の一人は、彼のアパートの部屋がゴミだらけだったことに驚いたという。その友人は彼に万引きに誘われたことを覚えていた。「スーパーかコンビニでお菓子を盗もう」と。小学高学年になるころ（？）、父母は離婚し、母が出て行った。中学では柔道部に属していた。その同級生「青葉が内股をかけるとき、相手の金的を蹴り上げるので、誰も彼と組み手をしたがらなかった」その中学の途中で、彼は不登校になった。
１９９４年４月に定時制高校に入学。その在学中に埼玉県庁の非常勤職員として勤務した。
１９９９年にコンビニで働くようになり、実家を離れ、春日部市内のアパートで一人暮らしを始めた。その１２月に、事故で廃業した父が生活苦による自殺。しばらくして、それまで連絡を取り合っていた兄とも、「兄とは会いたくない」と拒絶した。
２００６年に窃盗を働き、逮捕されたが、執行猶予になった。派遣社員としていくつかの職場で働くようになった。一時的には郵便局で配達員として働いた。

しかし、２０１２年に坂東市内のコンビニエンスストアに包丁を持って押し入り、約二万円を奪って逃走した。

逮捕時、家宅捜査に立ち会ったアパート管理人が青葉の異常な日常を証言する。「３ＤＫの部屋には物が散乱し、弁当の容器などがそのままになっていた。布団が敷きっぱなし。パソコンがぐちゃぐちゃに破壊されていた。窓のガラスが割られ、壁には二つの穴が開いていた。毎晩、夜中の０時４分頃に目覚まし時計が大音響で鳴り、壁をドンドン叩いた」

検察の取り調べに対し、青葉は「仕事上で理不尽な扱いを受けるなどして、社会で暮らしていくことに嫌気が差した」などと主張。１２年９月に懲役三年六月の実刑判決を受けた。

刑務所で、昼は大人しいが、夜になると暴れた。約四カ月の間に十回ぐらい（懲罰房に入れられ）大暴れしていた。「ティッシュを口に詰め込んで自殺しようとした」こともあった。熱心に取り組んでいたのは、小説の執筆だった。夕食から就寝までの時間に書いていた。

１６年に出所後、さいたま市内の更生保護施設で半年間過ごした後、１６年７月からワンルーム賃貸マンション「レオパレス」に住み始めた。その後三年間、騒音トラブルが絶えなかった。

そして事件の四日前に、隣人「いきなり私の胸倉をつかみ、髪を引っ張りながら『黙れ、殺すぞ。こっちは失うものは何もないんだ！』と。身体からはなんともいえない不摂生の匂いが漂っていました」

青葉は「切羽詰った」という言葉を隣人に投げかけ、京都に向かった。

犯行後、青葉は錯乱状態で、「小説を盗んだからやった。社長を呼べ。おれの作品をパクリやがったんだ！」【毎日新聞朝刊 2019/8/1 社会

アニ放火、インターネット掲示板に昨秋９～１１月にあり、同社の名前を挙げるなどして「原稿落とされた」「京アニに裏切られた」「原稿叩き落して裏切る」などと、原稿の落選を意味する内容だった。ほかにも「爆発物もって京アニ突っ込む」「無差別テロ」「２０１２年にムショ行って」などの投稿もあった。昨秋には同社のホームページに特定の社員への殺害予告や同社に対する脅迫の書き込みが、２００回ほどあったことが確認されている。【毎日新聞朝刊 2019/8/8 社会

京アニ放火容疑者は、７年前の強盗事件捜査でガソリン放火を言及していた。
田島光浩氏「怒りのコントロールができない人はいるし、パターンがある人もいて、どう向き合うかが課題」【毎日新聞朝刊 2019/8/18 社会
京アニ放火殺人容疑者は、家族と離別、派遣切り、服役で孤立を深めた。２００９年、生活保護を受けた。大音量で音楽を流したり、壁をたたいたりした。】

０．京アニ放火事件

京アニ（アニメ製作会社・京都アニメーション）の第一スタジオが７月１８日にガソリンをまかれ放火された事件は、まれにみる大きな犯罪被害になった。約３カ月たった２０１９年１０月半ば現在で、３６人が死亡、その他、３０人余りが負傷し、その中には入院中で、また回復が危ぶまれる方もいるという。火傷の痕が残る方もいるだろう。京アニの第一スタジオの建屋は全壊状態であり、作品の原画なども多く失われた。
放火の容疑者は現場から逃げ出し、数十メートル走ったところで自身の負った火傷のために倒れこんだ、青葉真司（41）だ。彼は埼玉県から京都にやってきて、襲撃の準備や下見に数日をかけた。

１．トラブルメーカー

この男の行くところ、あちこちでトラブルを起している。刑務所の中でも、そうだった。昼間は大人しいが夜に暴れた、と複数の者が証言する。夜になると、青葉に、つらい記憶がよみがえったり、強い不安にさいなまれるようだ。彼の生い立ちや経歴を考えると、思い当たるものがある。
小学生のときに、父母が離婚した。その後は父の手ひとつで育てられたことになるが、父は家庭を顧みないタイプの男だったと推察される。父は運転手の仕事をしていたというが、一家の家計は極端に貧しかった。結婚が破綻したのも、経済的な理由かもしれない。２歳上の兄と、下に妹がいて、極貧生活のなか、三人が助け合って生きてきたのだろう。時には兄弟げんかをしただろうけど……。
中学生のとき、転校し、その学校にも途中で行かなくなった。何が原因だったか、明らかではないが、家賃の滞納でアパートを追い出されたのかもしれない。
高校のとき、働きながら、定時制高校に通った。このころ彼は貧しいながらも、普通の生活をしていたようだ。

青葉が二十歳のころ、父が事故を起こし運転もできなくなり壮絶な自殺をした。それをきっかけとするかのように、兄妹をも遠ざけ、孤立した生活を始めている。彼はだんだん普通の生活ができなくなっている。

２００６年に窃盗が発覚し、逮捕された。彼が２８歳のときだ。

働けなくなったためか、２００９年に生活保護を受けた。住むところに関しては、別離した母が手を差し伸べてくれたが、青葉の二度目の逮捕（２０１２年６月、コンビニ強盗）をきっかけにそれも絶縁した。

「仕事上で理不尽な扱いを受けた」という彼の言い分がある。働く環境がよくなかったと推察できる。常に非正規労働だった。派遣では、自分が働きたい場所に配属されるようなことはなかったと思われる。言われたとおり働くことが要求され、少しでも間違えたり遅れたりすれば、こっぴどく叱責される……。

彼の場合、４０過ぎても、常に人にこき使われる立場だったのだろう。低賃金で、人が嫌がるような仕事はすべて下っ端の彼に押し付けられたのかもしれない、働く気力もだんだん失われるほどに……。

伝えられた情報からは、相談できるような友達らしい人物は見えてこないし、女性関係も見えてこない。

２．性格

記事には、狂気、錯乱という言葉が出てくる。神経や精神を病んでいたとは診断されていない。健常者の範囲内にあるとしても、病的な傾向があることはうかがい知れる。

また記事の中から、彼が刑務所内で自殺を図ったというから、一時的なものにせよ、自殺願望があったわけだ。刑務所の中での自殺はむずかしい。

事件の四日前、隣人に「失うものは何もない」と叫んだのは、そんな自暴自棄的な心情の表れだろう。

自分の思ったことを押し通している。しかも体格がいいから、たいていの相手に腕力で押せる。そして自分の主張を押し通す。そして有限実行のところがある。恐れを知らないかのように、実行する。こうと決めたら、計画を練る知恵もある。

その典型的な例として、自分が騒音を出したわけでもないのに、青葉に胸倉をつかまれ、すごまれた。「オレには余裕はねえんだよ」と迫られた男性は、「本当に殺されるかと思った」というから、青葉は理解不能な言動をしている。

自分の感情をコントロールできず、いらいらして落

ち着けない。睡眠を十分に取れなかったのかもしれない。

青葉自身が誰よりも、「余裕のない」生活に悩んでいたかもしれない。生活していると、身の回りにゴミが出てくるものだが、彼にはかたづける気力がわいてこない。面倒なのだ。掃除などに手間をかけたくない。身体から臭いが出るようになっても、彼には気にかける余裕はなかったのだろう。

アパート住まいでは、上下左右の部屋から、物音が聞こえてくるものだが、青葉は、それにかなり悩まされている。音に対しては音で対抗した。大音響のスピーカーや、目覚まし音を鳴らし続け、壁をたたいたのも、隣室からの物音に耐えられなかったのも、青葉が「繊細な神経」の持ち主だったから、と推察する。

そのアパートの防音対策が不十分だったから、という理由もありそうだ。（青葉が住んだアパートの一つが、手抜き工事を報じられた「レオパレス」だったと聞いて、私は妙に納得した）

ここで彼の性格（私の推察を含める）をまとめてみよう――

・被害者意識が強い

自分は常に被害者だと思っている。推測すると、「小さいころ、近所のガキどもにいじわるされた。仲間外れにされた」「常に兄のお下がりを着ていた」「オヤジによく殴られた」「学校でいじめられた」「職場でも、刑務所でも、上の者によく叱られ、同僚に怒鳴られた、年の若い者に『でくのぼう』とバカにされた」「隣人の騒音に悩まされた（安眠を妨害された）」「警察では、長時間追求され、威圧され、ぼろくそにののしられた」

・音に敏感

物音を非常に気にしている。「隣室のやつらが故意に音を響かせる。（足音をたてる、ドアを強く閉める、音楽を響かせる、おしゃべりを続ける、水を勢いよく流す……）」

それらの物音に対抗するために購入した大音響スピーカーは彼にとって高価なものだったはずだが、しまいには、いらついて、それもぶっ壊した。

・自分の衝動的な感情を抑えられない

怒りをおえられない。パクることは許せない。「不正だろ、許さないぞ！」「テメーら、まとめてぶっ殺してやる！」

・自分本位

協調性がなく、自己中心的だ。他人の感情を理解して

いないようにみえる。他人の気持ちを推し量れない（思いやりがない）、「他人などどうなってもいい！」

3．小説を書いた・落とされた・パクられた

彼の部屋に原稿用紙があったというから、パソコンを使わず、原稿を手書きしたようだ。でも、匿名化ソフトを使うなど、パソコンあるいはスマートフォンを使いこなしている。青葉にどれだけ小説を書く才能があったか、興味深いところだ。（もしも文才があれば、破滅型の作家になったのかもしれない）

京アニは映像化のための小説を募集していた。青葉も応募し、複数の作品を出した。いつ応募し、どんな作品だったかは、知ることはできない。彼が出所した２０１６年のあとのことだろうから、数年前のことだろう。

手書き原稿を郵送したのだろうが、いずれも「作品の体をなしていなかった」から第１審査で落とされた。内容を読まずに落とされたのだろう。そんな場合、だいたい応募原稿は返されない。審査の合否も、落選者には知らせない。業界は、落選者に返事をするほど親切ではないし、いそがしいのだ。

青葉は、審査結果を待ち続け、イライラが募ったことだろう。原稿も返ってこない。そして、「おれの原稿を京アニが奪い取りやがったな」とする妄想を抱くようになる。

京アニには、似たような内容の作品が多数集まるのだろう。たまたま青葉も、似たような作品を書いたのかもしれない。青葉が書いた小説と、青葉が「おれの作品とそっくりだ」と思い込んだアニメ作品がどれなのかは、わからない。推測すると、青葉が〈勘違いするほどそれが似ていた〉可能性はありうる。

単なる青葉の思い込みかもしれないし、あるいは、過去に青葉が観た京アニ作品が、青葉の頭に残り、それを思い出しながら、似たような作品を書いて、自分の創作だと思ったのかもしれない。

京アニとしては、原稿を受け取った以上、提出者に「近似していること」を指摘されるような作品を制作したら、それなりに納得できるように誠意を尽くすべきだろう。似ている・似ていないの議論は、平行線をたどることがあるが、アニメを製作した時期が青葉が原稿を提出した時期より前であれば、疑念は晴れる。

青葉は公開されたアニメ作品を見て、去年の秋にパクったと言い出しているのだから、そのアニメの原作・脚本がいつ書かれたかがポイントになる。

いくら話の分からない相手でも、一つ一つ根気強く冷静に説明すれば、青葉も納得したかもしれない。
青葉の強いクレームに対し、京アニは対応したけれど、結果的に「パクっていないこと」を証明しなかったことになる。単に否定するだけでは、だれも納得しない。
結局、京アニの不十分な対応が、パクリ疑惑を深めてしまい、青葉の心頭に発するような激怒を引き起こした可能性がある。（対応が不十分だったかどうかは検証する必要がある）
たとえば、こんな電話のやりとりで――
「もしもし、こちら京都アニメーションです」
「青葉だ」
「またあなたですか、いいかげんにしてくださいよ、お願いします」
「オレの小説をパクったと言っているんだ。おたくのｘｘ作品と同じじゃないか。ストーリーも、男女のキャラクターも同じだろう。どうしてくれるんだ？」
「違いますよ。それは言いがかりというものです。…第一、私どもはあなたの小説なんて読んだことがないし、うちは特賞になった作品しか映像化しないから、パクることはありえない」
「現実にパクっているじゃないか。テメーなど話にならん。社長に代われ！」
「バカ言っちゃいけない。社長があなたと話すヒマはない」
「ナニー！」
京アニの担当者につっぱねられたから、青葉の怒りは心頭に発し、納まることはなかった。
昨年９～１１月に寄せられた２００件の襲撃予告は、青葉が発信した可能性が高い。
そして今年７月半ば、移動の新幹線の中でも、京都に着いて公園で野宿したときにも、冷静に考える機会はあった。しかし、彼は計画を変えようとしなかった。強い思い込みを持っていたことになる。
野宿から目覚めたとき、「さあ、予告したことを実行に移すときが来たぞ」

４．臨戦態勢

京アニは、青葉からの猛烈な抗議を受けた。対応した担当者は、その脅迫的な言動に辟易となった。話しても分かる相手ではなかった。その執念深さは並のものではなかった。青葉の本気度を理解していた。メールや掲示版での殺害予告や脅迫は匿名だったが、青葉

からのものと想定できた。直接京都の本社やスタジオにやって来て、怒鳴り込むことも十分にありうること、と思われた。

建屋のすべてのドアには、二重のロックをかけていた。外からは開けられないセキュリティーシステムを採用していたが、もしもの不審者・青葉真司の襲来に備えて、同社は催涙スプレーとさすまたを各施設に準備、第1スタジオに4台の防犯カメラを設置して警戒していた。

通常玄関には鍵をかけていたが、その日は来客があるために鍵をかけていなかったという。それは悔やまれることかもしれない。

5．事件が起きた

7月18日、青葉は第一スタジオのドアをすんなり開けた。

入口近くにいた職員の一人のが、その姿を見て、「あっ、何の用ですか、あなたはだれ？」と声を発した。

〈問答無用だ！〉青葉はすばやく行動した。そして叫んだ「**死ねー**、オレの小説をパクリやがって」

多くの人が働いているビルの入口付近で、バケツに入れたガソリンをぶちまき、ライターで火をつけたら、どういう結果になるか、この男には分かっていたと思われる。ただし、自分にも火が回り、重度の火傷を追うとは考えていなかっただろう。彼は第1スタジオに火をつけたあと、次のスタジオ、あるいは本社に向かうつもりだった。そのために二つのバケツを用意していた。

火の回りが早かった。部屋の中央にあった螺旋階段からいっきにビルの2～3階に火が立ち上り、黒煙が充満した。真夏の暑い日だったから、冷房を入れ、窓を締め切っていたから、多くの人がビルから出られなかった。螺旋階段とは別の階段を上れば、屋上に逃げられたのだが、屋上へのドアが開かなかった。開けられなかった。そのドアの手前で19人が折り重なるように倒れていたことは、一番悲惨だった。

鍵はかかっていなく、二つの回転つまみを回せば、留め金が外れてドアを開けられたのだが、それができなかった。煙でつまみが見えなかったのだろうし、気付けなかった。一つのつまみを回してもドアが開かないということに戸惑ったのだろう。おそらく、鍵がかけられているものと思ってしまった。ドアを蹴破ることもできなかった。

――炎と煙がせまってきたから、１９人が急いで階段をかけ上がった。〈すぐそこは屋上だ。ドアを開ければ、逃げられる〉と思えた。ドアを開けようとガチャガチャやっている者に、後ろから怒鳴り声がかかる、「どうしたんだ？早く開けろ！」、「開かないんだ！」、「ナニー？」

怒りと恐怖と絶望が１９人の心をいっぱいにした――

⑨ 立花孝志・うさんくさい男

【毎日新聞朝刊 2019/9/3 社会
４月の地方選でＮ国区議の当選を無効。区内に居住実体がなかった。】
【毎日新聞朝刊 2019/9/4 一面、特集ワイド
Ｎ国立花党首「ＮＨＫをぶっ壊す」で目立つ。】
【毎日新聞朝刊 2019/9/10 総合・社会
Ｎ国党首・立花孝志氏を警視庁が聴取した。Ｎ国を離党した区議を脅迫した容疑。
「裏切り者、徹底的に人生をつぶしにいく」などと動画で表示した。】
【週刊文春 2019 年９月１９日号 「人生潰す」Ｎ国立花代表に脅された人々の告白
発端は、Ｎ国が二十六名の当選者を出した今年の地方統一戦後、立花氏が所属議員に「一人百三十万円を貸せ」と突如要請した。（略）七月三日問題の動画がアップされた。立花氏は区議を名指しし、「徹底的に人生潰しにいきます」「お母さんも彼女も知っていますよ」「ボケ、コラァー、文句あんならいつでもかかってこい」とまくし立てた。
立花氏が〝敵〟を執拗に脅すのは昔から。（略）】
【毎日新聞朝刊 2019/9/28 総合・社会
Ｎ国・立花党首が動画サイトで発言「あほみたいに子供を生む民族は虐殺しよう」】
【毎日新聞朝刊 2019/10/9 総合・社会
Ｎ国・立花氏、参院埼玉補選に出馬表明。今年７月の参院選で、比例代表で当選したばかり。】

立花孝志（52）の場合、思いついたことを本気で発言しているところがある。直情的にみえる。
「あほみたいに子供を生む民族は虐殺しよう」と本気で言っているところがある。
また、ＮＨＫから国民を守る党（Ｎ国党）を離党した区議に対し、裏切り行為だとして、しんから震え上がらせるほどの言動をみせた。その家族にも危害を及

ぼしかねないありさまだったから、その区議は被害届を出した。結局、その後脅迫容疑で書類送検された。これでは人格者にほど遠い。党首としてのリーダーシップはどこから来て、どこへ行ってしまったんだろうと私は疑ってしまう。

「ＮＨＫをぶっ壊す！」とは、なんと勢いのよいことだろう。しかし、それが誇張でないとしたら、とんでもないことを言い出している。爆弾でも仕掛けて、ぶっ壊すつもりだろうか。

表現が大げさすぎる。それはＮＨＫをヘイトしている表現だろう。その掛け声の奇抜さが、政治はどうでもいいと思っている選挙民の一部に受けたようだ。奇をてらったり、大言壮語したりする人は、おもしろい存在だ。言葉だけでなく、身振り手振りで表現する。「ＮＨＫをぶっ壊す！」と言いながら、独特のポーズを決める。顔で笑いながら……。お笑い芸人の、一発芸に近いパフォーマンスだろう。現に、彼は芸能事務所に所属している。

あるいは、ＮＨＫ歴代会長のワンマンぶりに反感を持った人たちが、全国に小数ながらもいて、Ｎ国党を支持したのかもしれない。小数派とはいえ、２０１３年６月に彼が結成したＮ国党は、今年の７月の参院選で政党要件を満たすまでに成長した。しかし、このまま成長が続くとは思えない。ボロが出始めているから……。

立花孝志氏は、元ＮＨＫ職員だった。高校を優秀な成績で卒業後、就職先として難関のＮＨＫに入局し、経理処理を含む総務の仕事を約２０年勤めている。

（どこの高校かは、言わぬが花）

２００５年４月にＮＨＫの不正経理を内部告発した。内部告発するとは、なかなかの正義感の持ち主と思ってしまうが、それを外部の週刊誌に売り込んだかたちだから、動機があやしい。局内で思うように栄転・昇進できなかった不満の表れだったとも目される。

そして同年の７月に、彼自身の不正経理（３００万を不正に引き出したとされる）が発覚し、懲戒処分され、依願退職した。不正経理はＮＨＫの組織的なチェックの甘さがあったからと推察されるが、彼だけ重く処分された。そのときのいきさつから、ＮＨＫをぶっ壊すと言っているところがある。個人的なうらみがあったのだろう。それらを根に持って、選挙演説でそれを叫ぶのであれば、「場違いである」と言わなければならない。

現実にＮＨＫがぶっ壊されたら、テレビやラジオの

放送が視聴できなくなるから、大勢の人が困るし、私も困る。ＮＨＫは比較的まじめな番組作りをしているから、好感を持っている。ＮＨＫには、番組予告がときどき入るけれど、民放のように、売り込みのためのコマーシャルが入らないところが一番いい。民放では、番組の途中でもニュースの途中でも、はではでしいコマーシャルがいきなり入るのだから、いらだたしくなる。にぎやかで、めまぐるしく映像が変わるコマーシャルが連続して何分間にも渡って流されると、番組の再開を待つことが耐え難くなる。今では私は、民放をたまに見るぐらいにしている。そんな民放だけを視たいという人はどれだけいるだろうか。

実は、彼らは「受信料をスクランブル方式にしろ」と言っているだけのことだ。スクランブル方式〈料金を支払っている契約者以外には、映像をかく乱して見せない方式〉とは、見た時間分に料金を課すもので、一律的な現行方式〈テレビを持っていると、受信しているものとみなす〉と、基本的には大きな違いはない。テレビを見る人が料金を払うことが基本になっている。ＮＨＫの受信料を払いたくない人は確かに相当数いるだろうが、いずれにしても、観るためには受信料を払うことに変わりはない。料金をとる方式の違いだけだから、料金プランの問題だろう。だいたい、ＮＨＫの放送を視聴したくなければ、テレビやビデオを買わなければいい。テレビを持っていなければ、受信料を払わなくてすむ話だ。スクランブル方式にしたら、視聴者が観たい番組だけを放送する傾向が強くなるだろう。一般の人が観たい番組とは、娯楽色が強く、俗悪的なものや、興味本位なものだろう。

そんな些細なことを国政選挙のスローガンにするとは、国民を見くびっているとしか思えない。政党の理念としておかしい。政党なら、もっと大事な政策を一番に掲げるべきだろう。

彼は、ＮＨＫがスクランブル方式化を達成したら、ＮＨＫから国民を守る党を解党し、議員を引退すると公言している。〈それだけのことで政党を立ち上げ、議員になったのか？　まじめに国政を考えてくれよ〉と私は突っ込みを入れたくなる。つまり、彼の思いつきのようなスクランブル方式をＮＨＫに押し付けることにこだわっている。つまり、自分の意見を押し通すことで、ＮＨＫへ報復を達成するつもりだろう。政治圧力的に弱いＮＨＫの足元を見たかのように、彼自身が立ち上げた政党を後ろ盾として、ＮＨＫに圧力をかけようとするのだろう。威圧すれば、人は動くと思っ

ているのだろう。
「ＮＨＫをぶっ壊す」とは、そうとうな脅し文句だ。彼のＮＨＫに対する一念（怨念）の表れだろう。私情を政治に持ち込もうとしたことになる。しかし、一部の人たちが〈やれ、やれ！　ぶっ壊せ！〉と、おもしろがってけしかけた結果が、本年７月の参議院選でＮ国党に集まった投票数に表れた、と私は解釈する。その数でＮ国党は政党要件を満たすものになったから、彼のもくろみは大成功したといえそうだ。
余勢を駆って党勢をさらに広げようと、彼は、また次の選挙があれば、うって出ようとする。いくつかの批判の矛先をかわす狙いもあるのだろうが……。
他の公職選挙で立候補すれば、参院議員を失職するが、比例代表で当選した彼だから、彼が失職しても次点者が繰り上がる。党勢は維持されるとちゃんと計算している。彼はその次点者にたっぷり恩を着せるのだろう。その分、Ｎ国党に金を貸せと迫ったりして…。

⑩　小泉進次郎・具体策はあるかと聞かれて黙る男

【モナニュース 2019/9/25【政治】小泉進次郎、脱石炭の具体策を問われ「大臣に先週なったばかり」と苦しいコメント
９月２４日、記者から「石炭は温暖化の大きな原因だが、脱石炭火力に向けて今後どうする？」と質問された小泉氏。即座に「減らす」と答えたが、記者から「どのように？」と具体策を尋ねられると答えに詰まった。６秒間の沈黙後、出てきたのは「私は大臣に先週なったばかり。同僚、環境省スタッフと話し合っている」と苦しいコメント。】
【Business Insider 2019/10/4［進次郎環境相の沈黙のナゾ。周到すぎる官僚たちの想定問答集はどこに消えたのか　南龍太］
帰国して最初の１０月１日の閣議後記者会見では、訪米中の海外メディアとのやり取りで、石炭火力を「減らす」と答えた後に具体策を問われてしばし沈黙したことに関し質問が飛んだ。
小泉氏は沈黙の真意を問われると、「（気候変動問題に関する）国際社会の受け止めと国内の相当なギャップを痛感した。その中で、石炭についても国内と国際は相当違う。そういうことを鑑みた時に、どういう答えをすることが最適なのか、考えた結果」と答えた。】
【毎日新聞夕刊 2019/10/9 特集ワイド
小泉進次郎環境相が迷言で注目されている。

気候行動サミットで米ニューヨークに行ったとき、ステーキ店で「毎日でも食べたい」と記者たちに笑顔を見せていた。

この言葉が、畜産が気候変動の要因の一つであることを知らなかったのだろう、と批判が起きた。牛が出すメタンは主要な温室効果ガスの一つだし、過放牧が砂漠化を招くとの指摘がある。

９月２２日に、環境保護団体主催のイベント会場で、「気候変動のような大規模の問題に取り組む際には楽しく、格好良く、セクシーでなければならない」と演説した。

「セクシーとは何か」と記者が質問すると、「説明すること自体がセクシーじゃない」とはぐらかす。このやりとりで、多方面から批判を招いた。

９月１７日、福島を再訪した小泉氏に記者団が中間貯蔵施設（汚染物質をどこに置くか）について問うた。その答え、「３０年後の自分は何歳かな」【

会見の場で、おおざっぱな構想や方針を示したとき、聞き手が「具体策はあるのか」と聞くのは、いじが悪い。なぜなら、具体策はこれから考えることであるからだ。しかし「まだ考えていない」とは、答えづらいものなのだ。

具体的に策定するのは今後のことだから、「まだ考えていない」とすなおに答えるのは恥ずかしい。そう答えると、「具体策がないのに言ったのか」、「当然、考えておくべきじゃないか」などと、見くびるような目を向けられる恐れがある。かといって、いいかげんに答えてしまうのはウソになるから、言いにくい。うそがばれるようなことになれば、二重の恥をかくことになる。あいまいにはぐらかしたり、その場をごまかしたりすると、また大変だ。「まともに答えていない！」となる。すぐに「いいかげんなことを言っているね」という印象をもたれる。なかには叱責する人がいるかもしれない。「調子のいいことをいって、何一つまともな具体策が出てこないのか」、「それが具体策か？　上に立つ身分なら、しっかりしろよ！」となるかもしれない。

また、「セクシー」発言について、アメリカ人記者には「セクシー」の意味がわかっていたはずなのに、あえてその意味を質（ただ）している。複数の意味があるにしても、ネイティブ・スピーカーならば、どの意味か、だいたい見当は付くものだろう。ニューヨークでは、はやり言葉であるらしいのに……。私は文脈から「ス

マート」の意味に近いと思っている。
小泉進次郎氏が記者たちにいじめられたもう一つが、石炭火力の問題だ。
海外メディアの記者に、石炭火力をどうするかと聞かれて、彼は「減らす」と答えた後に、間髪をいれずに〈じゃー、どうやって？〉と具体策を問われたとき、しばし沈黙した。答えに窮したかのように、６秒間ほど間を置いてしまった。
そして、言い訳でもするように、「私は大臣に先週なったばかり。同僚、環境省スタッフと話し合っている」と言ったが、答えになっていなかった。
その件について帰国してからも日本の記者に、なぜ沈黙したかと追求を受けた。記者はどこまでもしつこいのだ。それは本人に直接聞くより、察してやればいいことだろう。
彼なりの言い訳をしたが、私が推察すると、〈まだ検討していない・考えていないなどと言うのはシャクなことだな、この場で思いついたことを言ってしまうか、いや待てよ、検討もしていないのに、いいかげんな案は出せない。そもそも石炭火力については環境省の所管だろうか。他省庁のことで私がさしでがましいことを言ったりはできない。でも、ここで何か答えなければならない〉などと、彼の心の中で葛藤があったものだろう。それを考慮するためには、６秒では足らないぐらいだろう。
具体策を示さなかったのは、環境大臣として正しい。環境大臣という組織の長としては、方針を示すことが大事であって、具体策を固めることは組織の中で考えることだ。〈石炭火力を減らす〉としたのは、立派な方針だ。トップが方針をしっかり定めれば、あとのフォロー・詳細については組織が動くことになる。
手順として最初から具体案があるのは、ありえない。方針を示す談話や演説のあと、聞き手がすぐに具体策を求めるのは、性急過ぎるだろう。それでは、未検討の、拙速な案しか出てこない。実効性のある案が出るのは今後のことだと解釈すべきだろう。そんな具体案が示されるまで待たなくてはならない。せめて、「いつまでに具体策を出すつもりか」という質問をすべきだろう。
想定していなかった質問に答えるのは難しいと理解できる。けれど、大臣ともなると、いじわるな記者がいじわるな質問を仕掛けてくることも想定しなければならないのかもしれない。

⑪ 山本太郎・みごとな街頭演説をする男

【毎日新聞朝刊 2018/7/22 総合
れいわ新選組が比例で２議席を獲得した。優先的に議席が得られる『特別枠』でＡＬＳ患者と重度障害者の２人が当選した。代表の山本太郎氏は参議院落選の見込みだが、次期衆院選に立候補する考えを示した。れいわは山本氏が１人で旗揚げし、無党派層への浸透を図った。約３カ月で４億円以上の寄付を集め、山本氏の演説会も聴衆が毎日１０００人以上を超す現状になった。】

【毎日新聞朝刊 2019/7/28 総合
「もうエリートによる、エリートのための政治は要りません」というれいわにシングルマザーや派遣労働者が共感する。渡邊照子さん（60）は、２５歳のときに夫が失業し、派遣労働をして２人の子を育てた。
「貧乏で地べたに這い蹲ったから、見えるものがあるんだ」「消費税を上げて年金も少なくなる。みんなで怒ろうよ」など、太郎さんは「金持ちのための政治をやめよう」とか、当たり前のことを訴えている。
中島岳志氏「左派政党は基本的にエリート政党だ。山本氏は街頭で質問されたとき、「僕には分かりません、詳しい人がいたら答えてください」「生きてくれよ！」と呼びかける。】

【毎日新聞夕刊 2019/7/30 特集ワイド
れいわ新選組の山本太郎代表（44）が熱い。生活底上げを旗印にする。】

【毎日新聞夕刊 2019/7/30 あいた元気になあれ
れいわが人をひきつけた。「あなたは存在しているだけで価値があり、あなたが生きているだけで価値がある」の言葉が妙に新鮮だった。】

【毎日新聞夕刊 2019/8/14 与良政談
山本太郎氏はたった一人で「永田町の外から動かす選挙」をやってのけた。「生産性で人間の価値、測られてないですか？」等々の山本氏の演説には私も正直揺さぶられた。】

【毎日新聞朝刊 2019/8/22 総合
木村英子氏は、２０１５年に山本太郎さんの講演会総会に出席したとき、配られた政策に障害者政策が書かれていなかった。「ぜひ取り組んでほしい」と発言すると、太郎さんは「皆さんにお約束します。これから力を入れます」と宣言した。】

【文藝春秋 2019-10 月号「れいわ新選組・山本太郎の研究」常井健一（以下は抜粋したもの）

山本太郎が政見放送で訴えた、「永田町の空気は一切読まない。与野党に緊張感を与える。国会内でガチンコで喧嘩する勢力を、あなたの力で拡大させてください」

自民党の選対委員長、甘利明は（山本の躍進を）こう説く、「誰も考えないというか、やらないことをやった。それが新鮮だと感じた人々に、有名な俳優さんならではの演技力、発信力とうまい脚本がマッチして強烈なインパクトを与えた。見事な芝居を見るようでした」

山本を細川護熙になぞらえる向きがあるが、私は若き日の菅直人のほうがそっくりだと思う。七十二歳になった菅も言う、「幾つかの違いはあるけれど、草の根の地道な運動が土台にあり、時の政権と対極にある象徴的な候補を立て、カンパとボランティアで支援を広げた手法は昔の私と共通している」

れいわの演説会場では、大型のオープントラックが目に入る。録音スタジオにあるプロ使用の音響ミキサーが野外にデンと置かれている。機材に向き合うオペレーターたちは、山本がマイクを握るなり、山本の声調、会場の騒めき、天候や気温を読み、耳あたりの良い音質に瞬時に調整してから、超高性能スピーカーを通して聴衆に声を届ける。音へのこだわりは質だけでなく、より遠くに届けるため、貴重な機器を使い、街頭の奥の奥にまで声を飛ばしている。山本陣営は十人近いプロを揃え、駅前をライヴ会場に変える。山本は「声が聞こえる範囲にしか人は集まらない」というリアリズムに徹している。

元田中角栄秘書の朝賀昭は、「田中先生の再来だ」という噂を聞くうちに気になって演説会場に足を運んだ、「駅を出た途端にすごい人だかりで身動きが取れなかったけど、遠くから聴いていても木戸銭払いたいと思えたな。あるべき論みたいな優等生の演説じゃない。『あなた、どうなの？』と一人ひとりに別々の話ができる。ご婦人に、老人に、子連れの人に、胸を揺さぶる言葉を届けられる。オヤジ（田中角栄）が常々、『困っている人に手を差し伸べようという気持ちが起きない奴は政治家になったらだめだ』と言っていたのを思い出したよ」】

【毎日新聞夕刊 2019/10/8 特集ワイド

れいわ新選組・山本太郎代表、年内解散総選挙を想定して次期衆院選の準備を本格化させている。消費税を１０％にアップされた１０月１日、東京・ＪＲ新宿駅西口で街頭演説し、「どっち向いて政治をやっている

んだ。中小、零細企業の首がさらに絞まる。増税が必要なら、ないところからとるな。あるところから取れ！」と説いた。２時間以上に及ぶ演説に１０００人を超える聴衆が聞き入った。】

「山本太郎の演説がすごい！」との評判が広まって、演説会場はどこも超満員の盛況だという。人を引き付けるこつをつかんでいる人だ、と私はみた。

私は彼の直接の演説には立ち会っていないが、文字情報、画像、映像から、その熱血ぶりをうかがい知ることができる。

彼がターゲットにしているのは、無党派層だ。政治的圧力団体とは無縁な、組織に属さない「弱い立場の人々」だ。彼らの声は政治に反映されていない。でも、票数は大きい。彼らの票を集めれば、政治のひのき舞台に上がれるという確認を持っている。自分は強い立場にいると思っている人は少数派だ。民主主義は多数派が上に立つ制度であることを利用しない手はない。彼らが票を投じれば、世の中がよくなると、あおる……。「弱い立場の人々」がりっぱな圧力団体になることを目指す。それはポピュリズムといわれている。

人々を引き付ける彼の特徴的な演説の方法を挙げてみたい。

１．音響効果

演説会では、目立つ服装や、笑顔を振りまくなどのビジュアルも、好感度を上げるための一つの要素だが、山本太郎は音を重要視する。音声の質がいいことは長時間聞いていられる。音響にこだわり、上質の音を発するための音響設備を導入し、演説会場に持ち込んでいる。そして最適な音を微調整するためのスタッフを揃えたのは、いい着眼だ。明瞭に聞こえることは、声を届けるためによいことだ。

従来の街頭演説では、音が大きいだけがとりえのラウドスピーカーを用いていたから、音質がゆがみ、雑音が多く入る。聞いている側はうるさく聞こえたものだ。音声も聞き取りにくくなる。ダミ声を出すような候補者の演説は聞いていられなかった。がなっているようでは、聴衆はぜんぜん聞いてくれなかったが、今の音響技術ではかなり聞きやすくすることができる。

２．話し方

山本太郎は明瞭な発音で、歯切れよく、流暢に語る。時にはアクセントや、間合いを入れて、言葉を強調する。熱を入れて話す。熱血漢の印象を強くする。

１０００人もいる聴衆は、広い角度の方向にいるか

ら、それぞれに向きを変えながら、話しかける。歩きながら話すことも効果的だ。時には屈みこみ、顔を近づけるようにする。聴衆の一人に目を合わせる。

身振り、手振りも交える。顔の表情も変える。喜怒哀楽を顔に出す。それは俳優としての特質かもしれない。体全体での表現は、なかなかのパフォーマンスになっている。彼は若いころ俳優の端くれだったから、「それは演技力だろう」などと揶揄してはいけない。才能なのだ。

流暢に語ろうとしても、時には言い損なうことがある。でも、山本太郎はちゃんと言い直す。二度同じ言葉を言うことになるから、それはそれで、強調する効果を出している。

説明に熱が入り、話が長くなると、山本は「要するに」を入れている。同じようなことを繰り返し言ってしまいがちになるが、要点だけは、強調して言いたい。短い言葉で要約されるなら、聴衆にとって、分かりやすい。

3．問いかける

彼は聴衆にたびたび問いかける、「そう思いません？」

同意を求めることがある。聴衆の考えを確かめるために問う。答えを求めているのではなく、答えを考えさせることに主眼がある。

話が一方通行では、活性がなくなる。双方向の対話形式で話を進める形がよいことを知っているのだろう。ときどき質問の言葉を発することで、聴衆が話に乗ってきやすい。

「考えみてください」と聴衆に直接要求することもある。聴衆に考えさせる。

質問したとき、彼の頭の中には、たいてい答えが用意されているものだろう。

質問したら、思いがけず、聴衆の中の「へそ曲がり」から別の答えが返ってくることもあるだろう。

「そうは思わないよ！」

でも、ひるんだりはしない。「ありがとうございます」ととりあえず、礼を言ったりする。それは対応を考えるための、間を取ることでもある。彼の心の中では、（話の腰を折られて）ときには怒りが芽生えるのだろうが、それを静めるためにも、礼を言う。

4．切実な話題をとりあげる

難しい話はしない。人々の身近な、かつ切実な話題を取り上げる。社会の下位にいる人々の不満を代弁する。それを解決するためには、どうすればいいか、納

得のいく説明をしている。分かりやすさに説得力がある。

たとえば、多くの人が「生きづらさ」を感じているものだろう。山本太郎は「だれでも生きる価値がある」と勇気付ける。

人々は消費税にとまどい、物価高に悩む。政府が10%に上げたその日に、山本は早速怒りをぶつけた。「あるところからとれ！」という主張は正論だ。もうけすぎの企業や、稼ぎすぎの「金持ち」たちからもっと多くとれば、格差も減らせるものだろう。消費税は弱い人々からも満遍なく取れる税制だ。税を徴収する側にとって一番都合がよい。

5．質問対応

会場から難しい質問が出た場合には、率直に「わかりません、誰か知っている人がいれば、答えてください」

これは一種のはぐらかしなのだが、率直な態度をみせることは、聴衆にむしろ好感がもたれる。

下手に、答えに窮し、黙っていたり、いいかげんに答えたりあいまいなことを言ったりすると、それに対し、さらに追求が始まってしまうから、「分かりません」が一番適切な答えになっている。その件について、もうそれ以上、問われることはないだろう。

「あなたが知らないことを私が知らないことは恥でも何でもない。それとも、あなたは答えを知っていて、いじわる質問をしたのか？」という思いがあるかもしれない。ともあれ、答えになっていないことは口走ることは避けるべきだろう。

6．ヤジ対応

演説会場には、中には山本太郎に批判的な人も来て、野次を飛ばすヤカラがいるものだろう。不規則発言やヤジの声がかかったら、山本太郎は、「ご意見があれば、マイクを持ってみんなに聞こえるように言ってください」、「そこの方、手を上げてください、マイクを渡します」

聴衆から意見が出るのは、むしろ歓迎する。ヤジさえ、議論に巻き込む度量がある。時には、「ご意見、ありがとうございます」と感謝したりしている。

ヤジをやんわりたしなめたり、受け流したりしている。ヤジにいらだつことは損なことを知っている。

安倍首相のように、ヤジに対して向きになることはない。首相の街頭演説会では、側近らが忖度して、ヤジる者がいれば、強制的に連れ出し、排除したりする。

7．要望対応

記事にあるように、「配られた政策に障害者政策が書かれていなかった。「ぜひ取り組んでほしい」と発言すると、太郎さんは「皆さんにお約束します。これから力を入れます」と宣言した」という逸話があるように、要望されたら、すぐ取り入れる。柔軟な対応をする。

これは、たまたま政策のリストに障害者政策を入れていなかったためかもしれないが、すぐ取り入れる姿勢を見せることは、集まっている人々の好感度をぐんとアップさせるものだろう。障害者政策は、自身の政治的立場が「弱き者を助ける」ものだという印象を深めるためには格好のテーマだから、指摘されてちょうどよかったのかもしれない。

むすび

彼の演説は、神の領域に近づいている。

彼には〈これだけ聴衆がついてくれるのだから、選挙すれば、いつでも当選する〉という自信も生まれていることだろう。今般の参院選で、彼自身が選んだ障害者の2人を比例代表の特別枠に入れ、代表の自分を枠から外したのも、自信の表れだろう。〈おれは選挙の勝ち方を知っているんだ〉と心の中で叫んでいる。（あなたは、特別枠で当選した人たちをやっかんではいけないし、議員として働けるだろうかという疑念を持ってはいけない）

国政選挙のとき他人の応援演説によく狩り出される、自民党若手議員のナンバーワン、小泉進次郎氏も演説のうまさで評判が高いが、山本太郎の演説と比べれば、「かなり違いがある」と評したい。小泉進次郎の演説は理路整然として、なるほどと思わせるところはあるが、心に訴える（胸に迫ってくる）ところがない。このところ、〈話す内容が空虚だ、軽々しい〉などとの批判も出ている。山本太郎がかもしだす、底辺から這い上がるような「切実感や切迫感」に欠けるだろう。エリート的な小泉進次郎に対し、山本太郎には雑草的なたくましさがある。

「何とかしなければ、現状を打開できない。どうする？」と考えさせる。

「民主主義だから、われわれが政治を変えられる。しかし、選挙で投票しなければ、何も変えられない」と山本太郎は迫ってくる。